

## スピーチ講座第6回(最終回) わかりやすいディベートのための基礎知識

NADE九州支部事務局長・アナウンサー 加地 良光

### ●ディベーター語はどんな言葉？

ちりもつもればマウンテン、泣き面にビーといえばルー大柴さんの「ルー語」。また、あなたをおぬし、デモを一揆、クッキーを南蛮風せんべい、なんと面妖な、これは異なることを…若い世代に静かなブームの「侍言葉」。こないだ、ちゃんねーに、しーめーおごった…などという「芸能界・放送業界用語」(ちなみに、昔はそんな言葉を使っていたようですが、今は全く使われていません)。

さまざまところで、さまざまな言葉があるように、ディベーターにはディベーターの特殊な言葉・会話があります。発生過程、重要性、深刻性、それは固有性がない、議論を引っ張る、議論を落とす…やはり、不思議な集団に見られているかもしれませんね。

### ●わかりやすいディベートを目指す

ディベート用語に違和感のあるなしとは別に、実際にディベートを見ても、内容がよくわからないという声を聞くことは残念ながら少なくありません。ディベート甲子園の決勝戦ビデオを、導入の講座で視聴するかどうか、参加者が数居の高さを感じてしまわないか？気をつけているという指導者の声も聞きます。

そんな中、九州支部では独自フォーマット『パブリック・ディベート』の取り組みを進めています。目的は、ディベーターだけがわかるディベートではなく、はじめてディベートを見る人にも理解してもらえるディベート内容にしようというものです。

「パブリック・ディベートとは、市民社会における公共の論争的な論題をテーマとして、一般市民に公開しても理解が得られる討論のゲームを意味する。教育的な配慮のもとに、そのようなディベートを行うことによって、市民社会においてひつような議論の能力を育成することを目的とする」(「パブリック・ディベートルール」より)

そのためには、思い切って内容を削減し、スピーチの速度を落とし、極力ディベートの専門用語は使わない、重要な内容は繰り返すようなスピー

チのモデルフォーマットも作りました。フローシートをつけない人に向かってディベートをするという状況を設定して、ディベーターの意識を変えてもらおうと考えたものです。

勝敗は以下のポイントでの優劣の評価で決まります。

- ・ 立論 (明確な構成で、確かな根拠を示して論題を肯定あるいは否定する議論を行うこと)
- ・ 批判 (相手チームの立論に対して質問し、同時に適確な反論を行うこと)
- ・ 総括 (批判にこたえるとともに、討論の全体をまとめて自チームの優位性を示すこと)
- ・ 表現 (内容を整理し、声量や速度に配慮して聞きやすい好感の持てるスピーチをすること)
- ・ 態度 (マナーよく相手チームと対立しながらも協調して議論を深めること)

そして、とくに工夫が取り入れられたのは、試合評価ポイントです。両チームが共同で聴衆に対してどのような作業を行ったかを3段階で評価するようにしています。

両チームは互いに議論の内容を高め合い、聴衆にとって有意義な時間を生み出す共通の責任を負うことを評価に取り入れたということです。

「これまでのディベートは、専門的な文献から引用して、早口のスピーチを行うものであった。そのため、ディベートの知識や経験がないものにとっては、聞き取り理解することが難しいものにとどまっていた。そこで一般市民にも理解が容易で、好感を抱いてもらうディベートに転換したい。専門家を真似するような議論でなく、市民として必要な議論を行うようにしたい。難解な専門的な文献からの引用を必要とせず、早口のスピーチも排除する。詳細な記録をしなくても、記録に残るスピーチであってほしい(「パブリック・ディベートガイドライン」より)

### ●わかりやすさを放送原稿から学ぶ

私に関わる放送の世界では、はじめてニュースを見たり聞いたりする人でもわかる内容を求められます。その基準は、中学生にもわかる内容を

とされています(現実には中学生に理解してもらう内容にはなっていませんが・・・)。

新聞は目で活字を追い、読み返すことができます。しかし、テレビやラジオは、基本的に、すぐ消える「音声」でニュースを伝えます。視聴者に単なる「音」ではなく「聞く興味を起こす」対象として受け止めてもらわなければならないのです。そのためには、わかりやすい言葉で、的確な表現を工夫する必要があります。

放送の記事は、アナウンサーが読む文章です。読みやすく、リズムが要求されます。そのためには、センテンスを長くし過ぎないことが大切です。1つのセンテンスにいくつもの主語、述語を盛り込んだりせず、簡潔な文章にします。主語と述語はできるだけ離さず、関係をはっきりさせ、省略をしないことが大切です。文語的な表現を避け、専門用語や難解な言葉、官庁用語などは日常使う言葉に改めます。やむを得ない場合は、「つまり・・・」などと言い換えや説明の言葉を補います。二重否定、同音異義語も言い換えます。

さらに細かい放送記事作成上の注意を以下記します。

- ①「・・・ました。・・・ました」「・・・しています。・・・しています」「・・・ということです。・・・ということです」など、語尾が同じ文章を何度も繰り返されると耳障りになるので避けます
- ②ひとつの文章の中で「・・・が、・・・が」とか「・・・し、・・・し」と繰り返すことや「・・・ですが、・・・しています」など、同じ構造の文章が連続するのも聞きづらいので注意します。
- ③「また」「そして」「一方」「さらに」「このため」「例えば」「ところが」「・・・の」「・・・のもの」といった、接続詞や接続助詞などがあつたほうが文の続きがよくなります。視聴者は次に続く文章を予測できるから、理解しやすくなります。しかし、多用も耳障りとなるのでほどほどに。
- ④助詞のうち「・・・ことや、・・・こと」「・・・たり、・・・たり」などは2度目、3度目も省略せずに書きます。
- ⑤4字以上の漢字の連続は、できるだけ「・・・の・・・」「・・・を・・・し」など分解したり、軟らかにするような工夫をします。ただし、ひとつの文章の中で「・・・の」は連発しないことも注意。  
次に表現上の工夫についていくつか示します。

・数字の丸め方—細かな数字の羅列だと、耳に数字だけが残りに、話の筋の聞き漏らしてしまうことがあります。丸める際は「およそ」「近く」「前後」「あまり」「ほぼ」「ぐらい」などの表現で、1ケタの数字や小数点以下はできるだけ省略します。

例 9876円＝およそ1万円 42.3%＝4割程度

男性は22%＝男性はほぼ5人に1人

・名称の表記方法—人名や会社、団体名は、初出はフル表記にするのが原則です。略称・略語を使うときは、略称・略語を先に書き、正式名称はその後に書きます。2度目からは略称・略語だけにします。耳慣れない略称・略語は使わないようにします。

・言い換え方法—目で追うには難なく理解している言葉でも、耳で聞くと理解しにくい言葉や表現は多いものです。それは、常套句や文語体、漢語的表現であったり、聞きなれない用語、正式の固有名詞であったりします。同じ言葉でも文章の流れによってはその都度言い換えを変える必要のあるときも少なくありません。逆に難しい言葉も熟語やことわざ、慣用句ならわかるから判断に迷います。言葉の原義・意味をしっかり把握した上で、内容に沿った工夫が必要です。

例 講ずる＝取る、する 図る＝する

および＝・・・と・・・ 資する＝寄与する

いかなる＝どんな ...すら＝さえ

・・・よもや＝まさか 遺憾＝残念

経緯＝いきさつ 懸念＝心配・不安

示唆＝ほのめかす 真偽＝本当かうそか

非科学的＝科学的でない

非人間的＝人間的でない

不衛生＝衛生的でない

不具合＝できるだけ「故障」「欠陥」など

・・・的＝「的」がなくても通じるならとる

こうした聴いて分かることを前提とした放送原稿のテクニックを、ディベートで役立てて下さい。

今回までの6回、スピーチ講座を担当させて頂きました。アナウンサー、そして放送人としての知識で、ディベートに役立ちそうな内容をご紹介します。連載の機会を与えてくださったトライアングル編集のみなさんに感謝致します。

最後に、言葉により、多くの人の心を動かし、市民が学び合える「ディベート」の理解者が多く広がることを心から願っています。